私の長女もハシカで亡くしたが、夫婦共無一物で、郵便貯金なども引き出せず、息をひきとるのを手をこまねいて見守っているのみであった。

八月一日！追想

岡山県　平松純夫

四十六回目の八月十五日がめぐってきた、人間には理性のみでは解明し得ないことが起きるものである。これを偶然と云い、あるいは運というのであろうか、禍福はあざなえる縄の如しという。五十九回目の八月一日、私の身の上を次々と変えていった最初の日である。

農家の末男として生れた私は大学へは望むべくもなく悩んでいた折、降って湧いたように満州鏡泊学園が誕生した、学園創立者の山田悌一先生の思想に感銘し、昭和八年四月一日学園に入学し、八月一日、二重橋前で深々と祖国決別の頭を垂れ、神戸から出航し、在満十二年の歳月を経、再びわが身の上に降りかかった転機、それが大東亜戦争終結の年、昭和二十年八月一日であった。この間の十二年にわたる歳月を一寸振り返って見る。

学園生の夢は大東亜平和御連校の礎となれと実父の如く育くんで下さった山田總務と幹部職員を不慮の遭難で失い、遂に学園解散、よって私は同志四十五人と第四次城子河開拓団に入団し、昭和十年鶏西駅に接する城子河に入植した、営農の基礎も固まった折柄、当地区が無煙炭埋蔵地区と判明、国策遂行のため己むなく移転、昭和十五年、吉林省舒蘭県開拓地区に転入植した。

そして、昭和十六年の大東亜戦争へと突入した。我々学徒は平和御連校の五族協和が根本理念であったところから、戦況不利になっても別に異常は無かった、しかし一般在留日本人の不法行為や優越感がもたらした怨嗟は戦況の悪化と共に表面に出はじめた。

神州不滅の信念も身に迫る不穏な空気で揺るぎはじめていたさ中、遂に八月一日、根こそぎ動員の召集令

状がきた、覚悟はできていたものの、あとに残る婦女子のことを思うと断腸の思いがした。この八月一日が私個人にとって幸であったか不幸であったか、今もって判らない。

場所は新京第二中学校舎、野崎大隊柳沢中隊、与えられた武器は三八式の歩兵銃、それにトラック数両のみ、これが関東軍の精鋭かと心細さを感じた。破甲爆雷を背負いソ連戦車に突入する訓練をうけていた矢先の八月十五日、私は二等兵の飯あげ当番で炊事場で、聞きとれぬ終戦の詔勅の放送をきき、滂沱の泪をぬぐった。その後班長の命令で全員講堂に円陣を組み、班長の言葉、「最早なすべき何事もない、全員潔く自決せん」との声に全員只黙然としていた中で、「自分は死にとうないのう」と老齢の召集兵が言った一言は、今も判然と耳の底に残っている。それがほんの一瞬であり、若し誰かが銃口をくわえて、足の指で引金を引いていたら又、その瞬間中隊長が飛び込んで来なかったら恐ろしい連鎖反応が起きていたであろう、そして今当時を振り返る自分も無かったであろうと思うのである。

やがて武装解除をうけたあと、新京駅から貨物列車に乗せられて北へ向う。ブラゴエスチエンスクより、ウラジオストックに着き、日本に帰るのだと言うソ連兵の虚偽の宣伝を信ずる境地にいたのである。

黒龍江を渡り霧ふる対岸のソ連領内で裸足のソ連農民の馬鈴薯収穫をみた、ソ連兵の着古した軍衣と破れ靴、それに比し捕虜の我々の軍衣も靴もピカピカ上品のもので全く皮肉の対照であった。

シベリアの旅は長く続く、勿論一か所に五日間も停って動かないこともあり、四十八日間かかってウズベック共和国の首都タシュケントより更に百余キロの山の中の鉄道の終点、アングレン収容所に入れられた。運という一文字がここにも生きて迫ってくるように思った。

アングレンは大連ぐらいの気候で凌ぎ易い所だったのである。只宿舎も南京虫とシラミに全く閉口した。南京虫は生れて初めてである。

休日にはめ板ベットをはずして南京虫退治をやって

みたが到底絶えることはなかった。

しかしそれよりも何よりもみじめであったのは食べものである。愈々ソ連は捕虜に対する本心を表わした。

人間、否動物すべて食糧なくては生きてゆけない、この現実を思い知らされた。人間は知性を備えた動物である。原点であるエネルギーについては斯くも赤裸々に本性が現われるものであろうか。この時点では階級も社会的地位も全て剝奪されて動物の原点に返っているのである。僅かなバターの浮んでいる一掬のスープと一片の黒パン、これが大の男の食べる食糧である。それに加えてノルマのある労働を課せられている現状においてである。

帰りたい、家族の待つ日本に帰りたい。そして白パンを、銀めしを腹一杯食べたい。くる日も、くる日も同じ言葉のみであった。

こうした苦しい日々の中、我々大隊の作業は家屋の建設であった。他の大隊は炭鉱へ、鉄道建設へ、河川工事へと振り分けられたがアングレン地区には五千人とも六千人ともいると聞いている。この地区は豊富な炭鉱があり、何も無かった高地は日本人の捕虜の労働で築きあげられ、我々が帰る頃は立派な街に変ったのをみて驚いた。

私は大隊の壁塗班に組入れられ、経験のない仕事ばかりである。土煉瓦の凸部を削り、長い定規で線を出して粗塗り、中塗り、仕上げと連日泥との戦いである。天井塗りには閉口した。塗っても塗っても顔や頭に落ちてくるのである。屋根の上に出た煙突塗りはなお苦痛であった。捕虜の身となった以上は覚悟はしていたものの今なお苦しい夢を見るのである。

こうした苦しみの中、異国の山峡に幾人もの元日本兵が斃れていった。僅かに赤化思想を容認する者のみが生きのびることを考えていた。私にはたとえこの地で命終ろうとも心にもない、そうした芝居じみたことは絶対にでき得ないことだった。

八月一日が来た、四十六回目の終戦の日をむかえ、はるかにアングレンに眠る英霊をしのび、この稿を終る。